

## ◆ 19 世紀の幽霊

一年間の滞在予定で、アメリカに来ている。学生時代・院生時代に留学したことのない自分には、外国に住むのは初めてのことだ。もちろんいろいろと歴史について考えさせてくれる経験になるだろう。それがこの連載に影響を及ぼさないはずはなく、それについて書くことも増えると思うけれども、そこには、より詳しい知識のある人、経験のある人にとっては「何を今更」と感じることもあるはずである。自分自身、何かしらの気づきがあったように思ったとしても、改めてよく考えて自分の学んできた知識と照らし合わせてみれば、あたりまえのことだったりする。その繰り返しになっている。けれども、知識不足・勉強不足のためであったとしても、今まで思いもよらなかったような「問い」が次々と浮かび、これまで抱いていた「問い」の構図じたいが変わってゆく。それゆえ、素朴に虚を突かれてしまった経験を書き残すことも重要なのではないかと考えるのだ。

5 月の最終月曜日は、「メモリアルデー」といって、全米が祝日になる。南北戦争の戦没将兵の記念行事を起源に、南北戦争以来の全ての戦争の戦没将兵を追悼する日である。ハッピーマンデーが適用されているこの祝日により、三連休になる。また大学の卒業式はだいたい 5 月中旬から下旬で終わり、年度の切り替えが意識される時期である。この連休を合図に「夏休み」となる人も多い。そして新年度は 9 月からである！（とはいえ、いまはまだ「サマーセッション」という授業期間でもある）

祝日であるその月曜日、車で一時間あまりかけ、古戦場のゲティスバーグに行った。南北戦争のターニングポイントとなった古戦場であり、戦死者のための墓地での奉獻式典で行ったリンカーン大統領の演説でもあまりに有名な場所である。戦いは、南西にある港町ボルティモアへの街道を確保した北軍のいるゲティスバーグの町の外延の丘陵に対し、南軍が北側に回り込んで半包囲するかたちで行われたようだ。

戦場となった町を含む東西南北一帯は国立軍事公園になっており、ビジターセンター（ミュージアム）と国立戦没者墓地を中心に、のどかで見晴らしの良い草原やなだらかな丘、雑木林が広がっている。広大な地域が公園として指定され、ゲティスバーグの戦いの巨大さを想像することができる。そしてビジターセンターで専用マップを渡された来訪者は、「ジュラシックパーク」よろしく、定められたルートを自分の車で回るのだ。陣地跡にはそれぞれ、各州の部隊の石碑や将軍の銅像が建っている。

午後からは、ゲティスバーグの街の中心から国立墓地に向けてパレードが始まる。警察車両を先頭に、市長や議員、退役軍人が乗るオープンカー、高校の吹奏楽隊、退役軍人たちの行進（戦争映画で有名な兵隊の訓練歌 *military cadence* を老人たちが大声で唱和しながら進む）、「Gettysburg Young Marines」なる、軍服を着て銃を担いだ子どもの集団（ボーイスカウトの軍事色の強まったものだろうか）、また、様々な時代の兵士や民間人に扮した男女の集団もいた。さらにまた、意味は全く分からないけれども、軍用ジープに乗った

少し不良気味の兵士と多少きつめなメイクの看護婦という組み合わせも見た。

そのあとは、墓地で式典が始まる。黙祷・国歌の斉唱があり、市長の挨拶や退役將軍の演説である。地元向けなのでもちろん、リンカーンの演説にも言及して、ゲティスバーグという土地の重要性も強調される。だが、聴衆は多く見積もっても 150 人ほど。後ろの方には、(黙祷と国歌斉唱のとき以外は)寝そべて聞いている人もいる。そこには、いかにものんびりとした時間が流れている。

墓地にある墓のそれぞれには、この日のために小さなアメリカ国旗(や、ときには花)が手向けられている。それでも相当な数があるのだろうが、アーリントン国立墓地が見渡す限りの墓になっているのとは少し違う。それでも、なだらかな丘の真ん中にある大きなモニュメント(「自由」を象徴する女性の立像の足下に、「戦争」「歴史」「豊かさ」「平和」の4体の像が座っている)の周りには、墓がないにもかかわらず、小さな国旗だけが無数に立ててあって、それらがこの墓地をそれなりに壮観にしている。そこにはじつはゲティスバーグの戦いの死者 6000 人以上が埋葬されていて、個別に墓が建てられていないのである。ただそれでも、敬意をもって接する必要はあれ、ここには何か威圧感のようなものがない。

また、普段は日本よりも数が少ないくらいだが、月曜日までを含めた数日のあいだ、道路をやたらオートバイが走っているのを見る。その多くは老人で、サングラスをかけ、バンダナをし、ときにはバイクの後ろに年老いた夫人を乗せている。彼らは退役兵で(VETERANS とか INFANTRY などというステッカーがバイクに貼ってある)、メモリアルデーにはそうした出で立ちで結集するらしい。この日と独立記念日、11月11日の復員軍人の日(VETERANS DAY)には、アーリントンのあるワシントンDCにアメリカ中(?)から、バイクに乗った老退役兵が結集するという。総じて彼らは恰幅がよく、押し出しが強く、日本の同年代の老人のように枯れては見えないけれども、あごひげにサングラスにバンダナ、ジーンズで大型バイクという姿は見事に画一的である。(バイクに長時間乗る以上、しかたがないのかもしれない)

もちろん、(当日は気づきようもなかったが)オリバー・ストーン映画『7月4日に生まれて』(1989年)で描かれていたように、小さなコミュニティの独立記念日のパレードなどでも、いろいろな感情が軍事や戦争、そして退役兵にも向けられているだろう。(トム・クルーズの演じる傷痍軍人は、それに敏感に反応していた)この月曜日、観光客のたぐいであつた自分にはそれらを見ることはできなかったけれども、パレードやセレモニーの「ゆるさ」のなかに、逆に、この社会に軍事や戦争が歴史として「根付いている」のを感じたわけである。

もちろん記念行為は、「歴史を体感する」やり方の一つである。同じ日のアーリントンでは、それなりに荘厳な式典が行われたであろう。ささやかな敬意ではおさまらない、緊張と高揚が張り巡らされる場所である。そうした国家行事は、今なお有効な、19世紀の戦争そして二つの世界大戦の亡霊だ。マス・メディアという(当時の)新しい技術が「体感」を

可能にしつづけているのである。

けれどもゲティスバーグもアメリカ史において決定的な場所の一つのはずである。そうした場所で、メモリアル当日の観光とも地元のお祭りともつかないゆるさを見て、ちょうど「靖国神社」ではなく「招魂社」が人々に愛される場であったことを思い出す。パレードの会場で配布されていた観光マップには、歴史観光を強調する見出しとともに、そこかしこに「ゴーストツアー」の広告が書き込まれていた。調べてみると、ゲティスバーグは、戦いで戦死した兵士たちの幽霊が出るという名所なのである。もちろんこれもまた、「体感」による歴史的できごとの継承のひとつなのだろう。